

# 山田秀三のアイヌ語地名研究

北海学園大学  
切替英雄

北海道立文学館  
2004年11月3日  
改稿 2005年1月5日\*

## 1 山田秀三さんとの出会い

「山田秀三のアイヌ語地名研究」と題してお話する。既に発表した「書評山田秀三『北海道の地名』」[14] および「頻出アイヌ語地名の形態論的構造」[16]と内容的に重なるが、アイヌ語文法の話は極力おさえ、山田さんがどのようにして地名の意味を解明していったのか例を用いて話したい。

私は山田さんとは数えられるほどしかお会いしていない。なくなられて12年たつが、それが悔やまれてならない。だがその一つ一つの出会いがよき思い出として心に残っている。

札幌の山田サロンにも萩中美枝さんの厚意で2,3度出席する機会に恵まれた。山田サロンの気持ちのいい雰囲気は山田さんの人柄が醸したものだ。こんなに悠然としてかつ暖かく自分の学問を語る人がいるだろうかとそう思った。透き通ったような精神の人とも思った。

今日の私の話は山田サロンで聞いた話を下敷きになっている。

本題に入る前に山田さんと初めて会ったときのことをお話したい。22,3年前、中川裕君に東京のお宅に連れて行ってもらったのが最初の出会いだった。私は生意気にもアイヌ語地名研究の存在は認めるにしても、アイヌ語研究全体からすればほんのささいなもので、問題とするに足りないと思っていた。だから山田さんの著書もろくすっぽ読んでいなかった。知里先生の有名な地名の書『アイヌ語入門』[5]と知里先生の没後に出た版の『北海道駅名の起源』[27]は読んでいたから、地名はそれで十分と思っていた。『北海道駅名の起源』は武田泰淳の『森と湖の祭り』の後書きで泰淳が推薦していたので買ったものだった。いろいろな議論のあった『アイヌ語入門』からはアイヌ語の名詞句の構造といったものを考えさせられた[13]。その中で一つ疑問に思っていたことを山田さんにいきなり質問した。日本語では「赤石岳」とか「赤石川」というが、アイヌ語では「石赤岳」とか「石赤川」というのではないだろうかというものだった。私のこの思いつきは、知里先生が『アイヌ語入門』の中で永田方正の『北海道蝦夷語地名解』[24]を批判したある箇所を読んだときに生まれたものだった[5, pp.110-111]。

---

\* 北海道立アイヌ民族文化センターが企画して北海道立文学館で催された展示会「アイヌ語地名を歩く 山田秀三の地名研究から」（2004年10月30日～11月28日）に関連して行われた講演「山田秀三のアイヌ語地名研究」（11月3日）の発表原稿を改めたもの。講演ののち、アイヌ民族文化センターの小川正人氏より山田秀三の「歌棄（オタスツ）考」（1986）の存在を教えていただき、改稿の際、その内容を取り入れた。また、北海道大学の高橋靖以氏より貴重な情報がもたらされた。お二人については本稿の該当箇所でもう一度触れる。

次のようなアイヌ語地名がある。

Suma-hure-pet〔スマフレベツ；シュマフレベツ〕「石・赤い・川」。永田氏はこれを「赤石川」としている（地名解 44）。

ここでは要素が勝手な順序に並び替えられて訳出されている。「赤石川」なら、Hure-suma-pet〔ふレシュマベツ〕「赤い・石〔の〕・谷川」、或は Hure-suma-nai〔ふレシュマナイ〕とアイヌはいうだろうし、げんにそういう地名も実際に存在するのである（地名解 394）。

知里先生はこう述べて

Suma-retan-nay「石が白い沢」  
Suma-rupne-nay「石が大きい沢」  
Wakka-hure-pet「水が赤い川」  
Wakka-peker-pet「水が清い川」

と例をあげ（訳は私流に変えてある）、これらを永田方正がことごとく語順を変えて「赤石川」のように訳したことをとがめている。しかし「赤石川」流のいわば日本語型のアイヌ語地名に関しては永田氏の『地名解』394 ページが指示されているにすぎない。私は、そのような日本語型のアイヌ語地名を疑っていた。もし私の疑いが正しければアイヌ語地名に日本語型がなくなるから、Suma-hure-pet を「石赤川」と直訳せずに「赤石川」と翻訳してもかまわないはずだ。しかし私の質問に山田さんはただ一言、「どちらもあるよ」と答えられた。

その一言で話はすんでしまい、私も引き下がった。このたび山田さんとの最初の出会いを思い返し、「石赤川」と「赤石川」をもう一度とりあげてみたかった。そこで『地名解』から hüre「赤い」を含んだ地名を探してみた。まず「石赤川」の型の地名は次に示すように 62 例中 6 例あった（訳は私流に変えてある）。

Shuma hure pet「石が赤い川」（札幌国・上川郡 p.44）  
Shuma hüre sorapchi「石が赤い空知（川）」（石狩国・空知郡・空知川筋 p.64）  
Oro hüre pet「中が赤い川」（胆振国・有珠郡・オサレベツ川筋 p.188）  
Oro hüre nai「中が赤い沢」（胆振国・有珠郡・洞爺湖 p.189）  
Oshike hure nai「中が赤い沢」（胆振国・幌別郡 p.202）  
Wakka hure pet「水が赤い川」（釧路国・川上郡・釧路川筋 p.340）

一方「赤石川」の型、すなわち日本語型の地名は次の 3 例があった。

Hüre shuma enrum「赤い石の岬」（石狩国・浜益郡 p.84）  
Hüre shuma nai「赤い石の沢」（天塩国・留萌郡 p.394）  
Hüre toi pira「赤い土の崖」（北見国・常呂郡・サロマトー p.426）

この数の違いだけからは、山田さんの「どちらもあるよ」というお答えを突き崩すことはできないのは明らかだ。やはり山田さんは経験を積んだアイヌ語地名研究家だったのだ。山田さんは決していい加減なことはいったり書いたりしないことをその後知り、あのときもそうだったんだなと思いつけている。ただ、この問題は一度徹底的にやってみる価値がある。これは山田さんがいう「アイヌ語地名のくせ」の問題だ。

## 2 アイヌ語地名への興味

アイヌ語地名に限らず、たとえば今回の新潟県の地震報道で新潟の珍しい地名がたくさんラジオに流れ、その素朴な美しさに胸がうたれるということがある。我々がアイヌ文化やアイヌ語に興味を持つのに、このような地名の魅力が機縁になることは多いのではなからうか。名前の由来、とくに地名の由来に興味を持つということは、広く見られる人文的な現象であると思われる。日本では既に風土記においてそのような関心があったことが知られている。アイヌにおいても同じような関心があったらしく、たとえば知里幸恵 (1903-1922) の『アイヌ神謡集』(1923) には次のような一節がある [6, pp. 86-87] .

Pii tuntun, pii tuntun!	パイパイ
tan hekachi wen hekachi eiki chiki,	この小僧め悪い小僧め、そんな事するなら
tan esannot teeta rehe tane rehe	この岬の、昔の名と今の名を
ukaepita eki kushnena!	言い解いて見る

ukaepita 「言い解く」とは本来何重にも縛られている紐などを解くことをいうのだろう。

白老の上野ムイテクン (当時 88 才) が 1957 年に語った神謡<sup>\*1</sup>では、この箇所に対応するところが

tapan notto	この岬の
teeta rehe	昔の名と
tane rehe	今の名を
eye kusne na.	おまえ、言ってみろ。

となっている。ムイテクンは幸恵より 34 歳も年上だが、このホテナオ (ムイテクンは「ホテナオ」と語っている) の話はずっと簡略化されていて、この箇所も ukaepita 「(名を) 言い解く」ではなく、単に ye 「(名を) 言う」となっている。しかし、そのようなムイテクンの語りでも地名を問うというモチーフは欠落していない。

山田秀三さんは、東北地方のアイヌ語地名に興味を持ったことがそもそもの始まりだったとどこかでお書きだが、今はアイヌが住んでいない東北に、なぜアイヌ語地名があるのかという点に深甚な関心を寄せられたものと思われる。「北海道のアイヌ地名では当たり前すぎてね」と天国から笑い声が聞こえてきそうだ。

また、山田さんはアイヌ語地名研究の意義についてもいろいろお書きだが、特に山田さんらしい私が好きな文章を引用したいと思う [30, p. 10] .

札幌は美しい町並みの都だ。ただ少し長く居ると喉が乾くような、何か物足りなさを感じる。できてから日が浅く、内地やヨーロッパの古い都市のような歴史の背景がまだ足りないからであろう。

開府以来百年に満たない。アイヌの時代も、記録に残っているのはそう古くない。しかし、幸いにして、この短い沿革でも、内地に比べると興味の深い、独特な香りをともなうものがあった。その歴史の一断片でも、忘却の彼方に押し流されないように、大切にしていって積み上げていったならば、やがて格調の高い、しっとりした北の都に仕上がるのではなからうか。

これは 1965 年に書かれた文章だ。

\*1 知里真志保監修, 北海道放送録音, 知里真志保を語る会所蔵の録音テープ。

### 3 アイヌ語地名の透明性

ここで、アイヌ語地名の根本的性格について一言したい。「地名」にあたるアイヌ語は ré という。しかし、ré は地名のみならず、人や物の名前の意味でも使われるから特に「地名」を指すというわけではない。さてアイヌ語・アイヌ文化研究の中であってアイヌ語地名研究は多くの人の関心を引き、また最も盛んな分野の1つだが、同じ固有名詞であっても人名の研究はそれほど進んでいない。それは、一つにこの2種の固有名詞の構造の透明性に違いがあるためと思われる。

多くの地名は合成名詞であって、構成要素に分解することが比較的容易にできる。またその構成要素の意味も少なくとも表層的にはおおむね分かっているため地名の由来・意味は個々の構成要素の意味をつなげることから推定することができる。ところが人名ではそのようなことがほとんど不可能だ。

砂沢クラ氏(1897-1991)によれば、旭川に Kosónka'aynu という男性がいたが、その名前は動詞 ko-sónko-kus に由来するそうだと。よその kotán から旭川の近文(ちかぶみ)に嫁いで来た女性が、月が満たないうちに男の子を出産した。それが問題となり、近文とその kotán との間でやり取りがあった。離れた土地の間で何かについて言葉のやり取りがあることを kosónkokus 「～について～に便りがある」というが<sup>\*2</sup>、それが kosónka と形を変えてその子の名前になった('aynu は男性の名の末尾につく要素。日本語の「彦」にあたる)。kosónka ではもう意味を成さない。成さないどころか、kosónka から元の kosónkokus にたどりつくこともできない。kosónkokus のままならば、アイヌ語を少しやれば由来や意味はともかく接頭辞の ko-、名詞の sónko 「便り」、動詞の kús 「通る」の3つの要素からできていることなどすぐわかる。それが kosónka と姿を変えればたとえパーフェクトなアイヌ語の話し手でも何のことかわからなかったであろう。おそらく名前の由来・意味を隠すための操作が意図的に行われたのだ。そのような操作は 'iták makúste 「言葉を奥にあらしめる」ないし 'iták 'e'óyakar 「言葉をよそで作る(?)」と言われた可能性があるが[28, p. 7, 112]、それが何のために行われたのかはわからない。人名における、アナグラムを思わせるようなこの操作についてはほとんど何もわかっていない。われわれは、由来・意味ともに不明な人名を前にしてなすことを知らない。ところが地名にはこのいわば言葉隠しはほとんどない。もしそんなことをしたら、場所の地理的特徴を伝えるというアイヌ語地名の合理的で最も大切な機能が失われてしまう。

### 4 地名の由来と意味

アイヌ語地名の研究にはさまざまな取り組み方があるが<sup>\*3</sup>、いわゆる「地名解」と呼ばれる研究がその中心にある。「地名解」とは何か。それは地名の由来、あるいは地名の意味を明らかにすることを期すものだ。

今、地名の由来、地名の意味ということを行ったが、両者は区別して考えなければならない。

地名の由来とは、命名という行為が行われたときの事情のことだ。一方、地名の意味とは、その地名がアイヌ語を母語とする人の心の内に喚起するイメージのことだ。初めの命名者の伝えたかった意図と後代のアイヌ

<sup>\*2</sup> この珍しい動詞に類似したものとしては、北海道立文学館が所蔵する「知里真志保ノート」の第90冊(CM90)p.26に、tuima kotan hanke kotan moshiri epittano esonkokushte 「おまえが遠くの村、近くの村、国中に通達し」、p.27には、tuima kotan hanke kotan ene ene ... kuni aesonkokushte 「わたしは遠くの村、近くの村に...すべきことを通達し」、p.70には、ainu kotan moshiri epittano tapne tapne i eesonkokushte yakun 「おまえが人間の世界、国中にかくかくしかじかということを通達するならば」というように(e-)sonko-kush-te 「(おまえ)が～に通達する」、「(a/-e-)sonko-kush-te 「(わたし・おまえ)が～に～ということを通達する」という例が見られる。

<sup>\*3</sup> たとえば地名の分布論的研究は山田さんが開拓した分野の一つである。

のイメージとが食い違うといったことは当然ありえる。知里先生の地名研究は語源研究、すなわち地名の由来の探求であって、地名の意味の解明を目標にしたものではなかったと思う。

ここで、地名の意味ということについて考えてみたい。私のいう「地名の意味」は、服部四郎先生の『樺太西海岸北部地名の共時論的研究』[8]に影響されて生まれた概念だ。それに従うと、地名の意味はアイヌ語の話し手の頭の中をおいて他には存在しない。たとえば私は釧路地方舌辛（したから）の伊良ユリ氏（1911年生れ）から次のような話を聞いた。[29, p. 110]

布伏内（フブシナイ hupusnay）というのは、松（フブ hup）の沢という意味だ。布伏内の沢には、<sup>ざつき</sup>雑木ばかり生えていたが、奥に3本、高さ1m [10mの誤植]位の松があった。それが目だったので、このような名前になった。

フブシナイの小川は伊良氏宅のそばを流れていたが、hup「トドマツ」が生えているかどうか確かめなかったのは今にして惜まれる。私には山田さんのような地名に対する熾烈な関心が不足していたからだろう。布伏内は、知里先生に従うならば hup-us-nay「トドマツが・群生している・沢」となるが、伊良氏ははっきりと3本と言っている。そして、他の雑木に混じってそれが目だつのでこの名がついているという。知里先生は、us は un の複数形だというバチェラーの説 [2, p. 543] を踏襲しつつも、本来は「群在」「群生」するという意味だったらしいと述べている [4, pp. 137-139][5, pp. 221-222]。ところが Sine-sunk-us-i という地名がある。「一本のエゾマツが生えているところ」という意味だと思われる。知里先生はここで「群生」などの意味がなりたないの、「一本の・エゾマツが・そこにいつも立っている・場所」と解し、us に群在・群生のほか「(そこに)いつもある」という意味もあるとしている [5, pp. 221-225]。これではつぎはぎの学説の印象は免れない。私は知里先生が立てた us の意味「(そこに)いつもある」はもとより「(そこに)群在・群生する」「いつも何かをする(ところ)」「何かをしつけている(ところ)」などに納得がいかない。

それはそれとして、私は伊良氏の言うことが舌辛の布伏内の名の由来だと主張したいわけではない。ただ、1人のアイヌ語の話し手（もっとも伊良氏は潜在的バイリンガル<sup>\*4</sup>だった）の認識を示したにすぎない。このような認識が kotán の数名の人に共有されていれば、社会的に確立した意味になっているといえる。地名解釈は理想を言えばこの社会制度化された意味を確かめてから進めるのがいいのだが、たった一人のアイヌ話者からさえ情報を得ることができなくなりつつある現在では夢話だ。しかし、本来はそうあるべきだったと認識していただきたいと思う。地名の由来の探求はまず、このような具体的な地名の意味から始めるべきだった。それは、語源説に事実の支えをあてがうものになったに違いない。

地名をその構成要素に分解し、その各々の意味の総和から地名の由来を探というのが知里先生の方法だ。これは、知里先生が創出したわけではない。知里先生が批判する永田方正の『北海道蝦夷語地名解』（初版1891年）[24]にいくらでも出てくる方法だ。しかしこの書物には同時に私が「地名の意味」と呼んだ、アイヌ語のインフォーマントが永田氏の質問に触発されて述べたこともかなり出ている。知里先生が「今のアイヌの老人の心」[3, p. 250]というまさにそれだ。なるほど永田方正は「地名の由来」と「地名の意味」を混同している。したがってこの書物は濁りがある、という印象を残す。しかし、アイヌ自身による地名解（アイヌが地名に触れて抱くイメージの表白、すなわち「地名の意味」）を記しているところがこの書物のもっとも資料的価値のあるところではないかとさえ私は思う。

ほとんど余談になるが、伊良ユリ氏に「舌辛」というのはどういう意味ですかと尋ねると、「シタカラ、シ

<sup>\*4</sup> 潜在的バイリンガルとは、おそらく幼年期はアイヌ語と日本語とのバイリンガルであったが、学童期以降アイヌ語の運用に抑圧が働いてアイヌ語が使えなくなった人のこと。

タカラ」と鳥が鳴いて行ったからだと説明してくれたのには度肝を抜かされた [29, p. 109] . 私が一驚した理由は皆さんもご存じと思う。『アイヌ語入門』に、鳥の鳴き声に由来するとして永田方正の地名解を痛烈に批判した箇所がある。これは「古老かならずしも真をかたらず」の節にでてくるものだが [5, pp. 21-24] , それとあまりにも話が似ているので本当に驚いた。私はむろん、先の hup-us-nay や pira-utun-nay 「山が裂けて破れて、膚がでていところの間」や onne-pira 「大きな崖」<sup>がんげ</sup>などの伊良氏による地名の説明とともに

舌辛の意味は、「土地をもらって、川の縁に住んだところ夜明け方、鶴が飛ぶ高さで、シタカラ、シタカラと鳴いて飛んでいく神様がいた。」ということだ。

と伊良の言うまを記録した [29, p. 109] . この「神様」というのは鳥に間違いないと思う。アイヌ語の話し手がこうたびたび地名の由来を鳥の鳴き声に帰すには何か深い意味があるに違いない。

私は、古老の言うことを葬らないでほしいと強く思っている。そういう人たちの話を事実そのものと受けとめて、それに基づきあれこれ解釈すべきであると考え。知里先生は「古老必ずしも真を語らず」 [5, pp. 18-24] といい、古老からの情報に頼る永田方正や他の研究者の研究を批判するが、私はアイヌの古老による解釈はアイヌ語地名研究の第一級資料だと考える。それは地名だけではない。たとえば植物名の意味でもそうだ。知里先生はアカザの茎葉 sirúskina を「sir (地) us (にたくさん生えている) kina (草)」と解釈し、それに対する河野広道先生からの問い質し、すなわち「トカチのアイヌの老人」は「sir (粉) us (だらけの) kina (草)」と解釈し、「ピホ口の老人」は「sir (臭) us (する) kina (草)」と言ったということを取るに足らない説としている [5, pp. 10-14] . しかしこれらアイヌの老人の解釈にも何か十分な根拠があったと思う。一人のアイヌ語の話し手ないし一つの kotán のアイヌたちがなす地名解釈をそのままに記録することはアイヌ語地名の「共時論的研究」と呼ぶことができる。後述の服部四郎の「カラフト西海岸北部地名の共時論的研究」 [8] はこの種の研究の古典となっていると思う。

アイヌ語の話し手自身の解釈は常に参照されるべきだ。例えば、つぎのような解釈がある。これもやはり伊良氏によるものだ [29, p. 109] .

ユパナイ yuppanay 鹿が出る沢「いたよ、鹿(が)」という意味だ。

この説明から、yuppanay は yuk-pa-nay 「鹿を見つけた沢」と分析できる。また、伊良氏のアイヌ語では音節末尾の -k が次の p- に同化することを示唆するものだ。さて、「いたよ、鹿」という証言は、yuk-pa-nay 「鹿を・見つける・沢」という分析に事実の支えをあてがうものだ。とはいえ、この分析とて名の由来を直接示すものではない。しかし、この分析は伊良氏の内省をよく説明している。それが無意味であろうはずはない。このような事実の裏づけもなくちょっとしたアイヌ語の知識からたとえ同じ分析を思いついたとして、それにどんな意味があるのだろう。

なお、さらに余談だが、アイヌ語地名は作られてから久しい時を経ていると思われがちだが(知里先生は1955年の論文で新しい地名であっても発生して150年は経過しているとみている [3, p. 247] . その根拠は不明)、意外に新しいものもあるのではないかと付言しておきたい。アイヌというと、たちまち太古の神話時代にまで遡ってしまう人がとても多いからだ\*<sup>5</sup> . 先ほどの布伏内の意味もこの地名がそんなに古くないことを暗示している。次のは再び伊良氏から得た地名の解説だ。 [29, p. 110] .

布伏内の川下にフシココタン(フシココタン husko kotan) というところがある。父がいうには、もとア

\*<sup>5</sup> 私はかつてある人から「アイヌは火を使っていたのですか」と尋ねられたことがある。

アイヌが住んでいたが屯田兵に追われて川上に移ってきたので、そう名づけられたそうだ。このフシココタンに「イムするババ」が住んでいた。

アイヌは近代にいたるまで狩猟・採集文化を色濃く残した民族であるというにすぎず、今にあっても神話時代に生きているというわけでは全くないということはいくら強調してもしすぎることはない。

さて、では、地名の由来を説くことに客観性を与えること、つまり事実の支えを与えることは、アイヌ語の話し手の証言（地名の意味の表白）のほかにはないのだろうか。それがあるのだ。言ってしまうと当たり前のことなのだが、それに気づき、それを自覚的に適用し、疑いをほとんど残さないほど確かな地名解釈に成功した人が山田さんだ。山田さんが気づいたことというのは次のことだ [14]。

地名と地形とは厳密に対応している。

山田さんにとって「地名の意味」または地名に用いられる単語の意味とは、同じ地名がついている場所、または同じ単語を共有する地名がついている場所が示している地理的な共通点ということになる。だから山田さんの方法を適用するためには、同じ地名、あるいは同じ単語を用いた地名が複数なければならない。そして、アイヌ語地名にはそんなことが多い。地形語彙の中から例をとれば、ご承知のようにたとえば pira は方々の地名に含まれている。pira は「崖」と昔から訳されているが、いったいどんな崖なのか、岩肌の崖なのか、地層の見える土壁というほうがふさわしい崖なのか。方々の pira を見て回り、地理的な共通点を探すほかない。そのようにしてかつてのアイヌが地名に即して抱いたイメージを我が物とする、山田さんはそういう研究をした。

## 5 オタスツ otasut の由来と意味の解明

otasut という一つの地名がある。この地名の由来と意味は山田さんによってほぼ最終的に解明された。この地名を例にとって山田さんがどういうふうにそれを突き止めたのか見たいと思う。

### 5.1 樺太のオタスツ

otasut というのは長い歴史を持つ地名だ。

松浦竹四郎（武四郎）の『竹四郎廻浦日記』の安政3年（1856）6月26日の記事にクシユンナイを出立し、樺太西海岸を北上、ヲタスに止宿とある [19, p. 219]。ヲタスには「止宿所」があった。翌日3里北方のライチシカ<sup>\*6</sup>まで行き、そこからクシユンナイに戻るが、途中再びここに止宿している。そのときの日記にはウタシユツと記されている [19, p. 222]。26日の記事の中には次のような説明がある [19, p. 219]。

此処平野。前に川有、巾十間斗、屈曲婉転として遅流にして深し。

武四郎の「北蝦夷山川地理取調図」[18, 六図]を見ると、ヲタシュと書かれたあたりからライチシカの湖に向けて平野が広がっているように（海岸に迫っていた山際が内陸の方に後退しているように）描かれている。そこが潟湖（ラグーン）と思われる湖を囲む平野の入り口のような印象を与える。

otasut はまたドプロトボルスキーの『アイヌ語・ロシア語辞典』（1873）に現れる [7, p. 234]。

<sup>\*6</sup> 後述の藤山ハル氏の故郷

Otassu または Otasù 地名 久春内から北方 36 露里 (38.4km) の小川とアイヌの村 . Otasuf 地名 ロシア人によって Otasù と呼ばれる小川と村の本来の名 .<sup>\*7</sup>

また、マイエビッチの『索引辞典』[23] によりピウスツキーの『アイヌの言語と口承文芸の研究のための資料』(1912) を探すと次の用例がでている [25, p. 195, 196] .

Otaštun nišpa オタシタの金持ち<sup>\*8</sup>

Otaštun kuru オタシタの人<sup>\*9</sup>

そして次の注釈が見られる . [25, p. 199]

Otaštun 「オタシタの」, 古い伝承で出会う村の名前 . ota 「砂」からの派生語 .<sup>\*10</sup>

Otaštun の Otašt が otasut に相当するものだろう . ピウスツキーが訳の中でなぜ Otašta ないし Otasta と末尾に a を補って表記したのかはわからない .

金田一先生が 1907 年、樺太のトンナイチャで採集したハウキ (ユーカラ) の主人公はポノシタ ツンク Pon-otashut-un-kur だが [11, p. 8], 中に「オタシュッコタン (オタシユト村)」という地名が出ている . それに次のような注記がついているが、残念なことにその意味は記されていない [11, p. 24] .

樺太西岸の小田洲は今も其故地として神聖視されてありといふ .

葛西猛千代, 西鶴定嘉, 菱沼右一の『樺太の地名』(1930) には、次のようなことが書かれている ( は葛西, は菱沼, は西鶴) [10, 59-60] .

小田洲=オダース オダウシの転訛, オダは砂, ウシは有る, 即ち砂の多い処の意 . オダス又はオダシュである, 丘の砂のある麓である「久春内の北十里半, 小田洲河口にアイヌ部落あり (中略)」と安政中, 奉行堀, 村垣の二氏が境界取調込書に曰く (後略). 旧称 オタシユ . 北海道日高のオタシユと同様で「土鍋を作つた処」アイヌはカモイシユ即ち (神鍋) と称した .

佐々木弘太郎の『樺太アイヌ語地名小辞典』(1969) のオタシユ (地名番号 419) の項には otastun, ota-sutu という語形とともに, 泊居郡の小田州, 大泊郡のヲタシユ, 敷香郡のオタスがあげられている . また, 金田一先生とピウスツキーがこの地名に触れていることなども書かれている [26, p. 146-7] . また, ota-sutu に続いて「砂浜 (の) 根もと」という知里先生の地名小辞典の解釈が紹介されている . 佐々木弘太郎はオタサン (地名番号 418) の項で ota-sam 「砂浜・の側」と記し, 既に知里先生の地名小辞典を見ているのに, オタシユとこれとを同じ意味とはしていない . これは意義深いことだ .

服部四郎先生の「カラフト西海岸北部地名の共時論的研究」(1969) では, インフォーマントの藤山ハル氏 (1900 年ライシチカ生まれ) が `otasuh を次のように解釈している [8, p. 19] .

12. `otasuh [ オタシ ] (小田洲) `ota 《砂, 砂丘》, suh は不明 . [ 別の地名に現れる suh は「ねもと」と訳されている (p. 31)—切替 ] (中略) ここの砂は踏むと膝まで位はいる . 足を抜いたあとに水がコト

<sup>\*7</sup> “*Otassu* ili *otasù*. Geogr. rječnika i Ainskoje sjeljenije b 36 vjerstax k sjevjeru ot Kusunaja.— *Otasuf*. Geogr. praviljnoje nazvanije rječki i sjeljenija, nazyvajemago Russkimi *Otasù*.”

<sup>\*8</sup> “Rich man of Otasta”

<sup>\*9</sup> “man of Otasta”

<sup>\*10</sup> “*Otaštun*, ‘of *Otašta*’ the name of a village, to be met with in old traditions. Derived from *ota*, ‘sand’.”



コトと煮立ち上がるようになるから suu 《鍋》 のようだというのか。(中略) 住んだことがないからよくわからない。(後略)

地名の由来の探求を志す知里先生が「古老かならずしも真を語らず」というのはインフォーマントのこのような語源説をとらえて言うのだ。しかしこれを棄てるのはあまりに惜しいと思う。前にあげた『樺太の地名』でたまたま「土鍋を作った処」という「地名の意味」が西鶴氏により報告されていたが、何か関係があるかもしれない。とはいえ、あとで述べるように 'otasuh がかつて「砂浜の・根もと」という意味を持っていたということが(5.3.1, 2), アイヌ語の優れた話し手の藤山ハル氏にも伝承されなかったのだから、この地名が長く複雑な沿革を経ているものであることはまちがいない。

## 5.2 択捉のオタスツ

次に択捉の otasut について松浦武四郎に従って見てみたいと思う。秋葉實氏の労作『校訂 蝦夷日誌【三編】』は武四郎が国後、択捉に渡ったときの日誌だ(1848)。武四郎は択捉島北岸を船で行く。「平磯」から「峨々たる処」に変わるといふカムイコタンを過ぎ、アトサノボリの沖を回り込む。「岩石屏風を建てたるがごとく」という句も記されている[21, p. 129]。『東西蝦夷山川地理取調図』[20, 24 図]では、アトサノホリの麓が険しい崖となって海に臨んでいるようすが描かれている。上陸はしなかったのだが小休所があってそこがヲタシユツだ。次の文が記されている[21, p. 130]。

漁多き時八此处二も出張りて獵漁をなすなり。是より白砂浜、平地行こと凡三十丁計なり

そしてヲタニマベツの沖を通るのだが、ここからは再び「崩岩」になる。『東西蝦夷山川地理取調図』ではヲタシユツからヲタニマベツまで、つまり磯浜と磯浜との間が美しい円弧で描かれている。白砂浜だ。

国土地理院の20万分1地勢図「紗那」にはよく発達した海岸段丘の下に砂浜が細長く、3,4km 続いているのが描かれている。同地勢図にはこの砂浜の南西端にオタシユツ(武四郎のヲタシユツ)、北東端に宇多須都と記されている。

さて、樺太と千島の otasut についてはこれでやめるが、山田さんが樺太と択捉の otasut にはまったく触れていないことは山田先生の残された仕事を考える上で大事なことだ。現地を歩いて見なければアイヌ語地名はわからない。わからないことは書いたり言ったりしないという姿勢が頑なと言っていいほど貫かれているのだ。

## 5.3 北海道のオタスツ

北海道の otasut に移る。

### 5.3.1 ota の意味

ota は「砂」「砂浜」「川岸の砂原」を意味する[5, p. 82]。これにはほとんど問題はない。知里先生の本にあるとおりだと思う。また、盛んに用いられる地名用語だ。松浦武四郎の日誌にもその説明が出ている[22, p. 13]。

ヲタは沙の事也。依て今濱をしてヲタと云り。

### 5.3.2 sut の意味

一方、地名に出てくる sut の意味がいま一つわからない。知里先生は「ねもと」「ふもと」と訳している。ユーカラには、たとえば次のような例がある [9, p. 295] .

kamui-mau etok	神風のさきに
aniyekoshne-	われら軽やかに
bumpa kane	乗じつつ
arkian humi	やって来る音
anekisar sut	わが耳元へ
mau kururu,	風が乗る，

耳のつけ根 (kisar sut) が風を受けてクルクル回っているという情景を描いた詩句だ。

永田方正の本をみると，

Shiri shut 「山下」(胆振国室蘭郡 p. 197)

Nup shut 「野傍」(日高国三石郡 p. 265)

So shut 「岩ノ下」(北見国江差郡 p. 436)

などが見つかる。「山の下」とか「岩の下」というのは「ねもと」「ふもと」などの意味と重なるが、「野の傍ら」というのはわかりにくい表現だ。Nup shut を「野の下」「野の根もと」「野のふもと」あるいは「野のつけ根」などとすると日本語にならないから、「野の傍ら」と訳したのだろう。永田方正が sut を「傍」と訳していることは後の知里先生の otasut の解釈に影響を与えたかもしれない。

(講演のあと北大の高橋靖以君からお手紙をいただいた。三石には延出というところがあり、そこで育ったアイヌの女性故浦川リウさんはノブシツと呼んでいた。延出川という小川があり、リウさんは幼い頃はその川の水を汲んだ。延出の右岸(西岸)は高台になっている。その高台がヌブであろう。したがってヌブシュツは高台の野の「根もと」と考えられる。という趣旨のことであった。山田さんは sut にずいぶんこだわられた。高橋君のこの報告を聞いたなら、どんなに喜ばれたことであろう。いやおそらくむしろ、なにはともあれ千歳空港からタクシーで延出に急いだのではなかろうか。)

山田さんは 1989 年の『常呂町百年史』に寄稿した「オホーツク海沿岸の小さな町の記録」で sut に触れている。そこでは、サロマ湖東岸の、先端が細い砂岬が ane-p 「細いもの」と呼ばれていたことを松浦武四郎の戊午日誌から知り、さらに「明治三〇年図」からその岬の「根もと」あたりがアネブシュツ anep-sut であることを見つけられたということが書かれている [33, p. 114]。どうやら sut の意味は kisar sut 「耳のつけ根」のように突出した部分が全体と接合している箇所ということらしい。「山の下」「(高台の)野の下」「岩の下」の sut も大地から突出したもののつけ根ということと理解される。

### 5.3.3 otasut の解明へ 山田説以前

佐々木利和さんが世に紹介した上原熊次郎の「蝦夷地名并里程記」(1824)にはのちの後志のこととして次のようなことが書かれている [34, p. 85] .

ヲタスツ 運上屋泊 スツツ江 渡海一里程 陸路二里程

夷語ヲタシユツなり。則、砂の蔭と譯す。扨、ヲタとは砂の事。シユツとは蔭と申事にて、此所、砂崎の蔭なる故、地名になす由。(以下略)

松浦武四郎の『新版蝦夷日誌』にはオタスツがどのようなところだったかを示す記述がいくつか見られる。瀨田内のヲタスツについてはこう書かれている [22, p. 40]。

ヲタスツ(人家多し), 此所より小石になるとの義也。

歌棄領のヲタシユツ(寿都湾内)には次のような記述がなされている [22, p.76]。

名義, 沙地と石地入接りの義なり。ホロナイ(小川), シユツシナイ(小川)名義, シユツは接堺の義也。今是をヲタシユツナイと云り(土人小や有)。

積丹半島北岸(武四郎はこれを東行する)のオタシユツをその前後の記述とともに示す [22, pp.139-140]。

(前略) シツテキシユマ(人家, 川有), 并て(五町廿五間)オタシユツ〔歌棄〕(小川), 是より海濱になる, 澤ひろし。

(中略)

沙地(六町四十間)タンネビクニ(濱)長き小石濱の義。(六町五間)ポロオタ(沙濱)大なる砂地の義。(十町)ヲタ泊(澗)沙澗の義。

古平のヲタスツをその前後の記述とともに示す [22, p.151]。「川口」とあるのは古平川の河口である。

扨川口を(一町四十間)メナシ泊〔目梨泊, 現名澤江〕(船澗\*11)と云。東風の時懸るに宜敷故號く(番や, 板くら, 戎社)。是より崖下傳ひ, 海岸暗礁多し。チャシユマ(大岩), 并て(三町卅間)フルビラエ(岩崖), 當所の地名此處より起りしを〔と〕。ヒウチ川(瀧川), 過て(五町十間)ヲタスツ〔歌棄〕(番や, 茅蔵, いなり社), 惣て人家繼ぎ(三町廿八間)ニシヨトマリ(岩磯), ヲロクチャ(灣有), フビツ石(小石濱), しばし(八町五十四間)ツルヌフ(小川), 上は崖にて轉太石濱,(五町廿五間)ラルマキ〔良留卷, 現名沖〕(川有, 幅五六間, 番や, 板くら, 茅くら, 戎社), 是より先海岸歩行難き故, 澤目に上る。

ヲタルナイ(銭函)のヲタシユツについてはこのように書かれている [22, p.181]。

ヲタシユツ(小川), 此處まで轉太濱, 是より沙地なり。

永田方正の『北海道蝦夷語地名解』(1891)には6つの Ota shut があがっている [24]。

Ota shut 沙傍(後志国・小樽郡 p.86)

Ota shut 沙傍 歌棄ト称ス(後志国・古平郡 p.97)

Ota shut pet 沙傍ノ川 今八西川村ト称す(後志国・積丹郡 p.102)

Ota shut nai 沙傍川 歌棄(郡, 場所)ノ原名(後志国・歌棄郡 p.121)

Ota shut 沙傍(後志国・瀬棚郡 p.130)

Ota shut 沙傍(渡島国・亀田郡 p.156)

\*11 「ふなどまり」と読むようだ。

永田方正には残念なことに同じアイヌ語地名には同じ訳を付けるという編集方針があり、それがこの本の資料的価値を下げている。Ota shut がすべて「沙傍」となっているのは面白くないではないか。一つ一つに「雇い質した」[24, p. 3] アイヌの証言を記したらどれほど生き生きとした良い本になったことだろう。「沙傍」ならばむしろ ota-sam 「砂浜の傍ら」という地名の方が相応しいかと思われるが、北海道には ota-sam は知られていない。いずれにせよ「傍」という訳語が何を言っているのかわからないのは上原熊次郎の「蔭」と変わらない。だが幸いにして先に見た武四郎の『新版 蝦夷日誌』に 6 つの otasut のうち渡島国・亀田郡を除いた 5 つの otasut に触れるところがあり、そこからある程度地形が想像できる。

ジョン・パチェラーの『アイヌ・英・和辞典』(1938) では次のように説明されている(1889年の初版ではこれらの見出し語はあがっていない。引用するのは第4版)[2, p. 369, 370]。

Otashu, 丘ノ砂ノアル麓 . A sandy foot of a hill. Syn: Otashup. Otasu.

Otashup, Otasu 砂ノアル丘ノ麓 . n. The sandy foot of a hill. Syn: Otashu.

Otashut, 山麓ノ砂地 . n. A sand-spit.

Otashu とか Otasu はおそらく樺太のものだろう。Otashup もおそらく樺太のものだろう。otasuh の末尾の h が唇摩擦音  $\phi$  であるのを反映しているのではないかと思う(ドプロトボルスキーでは f に相当するロシア文字で書かれている)。英訳の sand-spit というのは、「岬」「砂洲」を意味するようだ。それが気になるが、麓、砂(地)というのがポイントだと思う。この辞典の記述が後の知里説に影響を与えたのではないかと思う。『樺太の地名』(1930)にあった「丘の砂のある麓」(菱沼)というはおそらく『アイヌ・英・和辞典』第3版(1929)に従ったものだろう。

知里先生は『地名アイヌ語小辞典』で次のように解説している [4, p. 83]。

ota-sut, -i/-u オオスツ ‘砂浜〔の〕根もと’ の義。海から上れば砂浜があり、その砂浜をつきつて砂丘の上に上れば草原がある。その砂浜が尽きて草原になる辺りを‘砂浜の根もと’と言うのである。= ota-sam.

otasut は金田一先生の『アイヌ叙事詩ユーカラの研究(2)』、『ユーカラ集(1-9)』、久保寺先生の『アイヌ叙事詩神謡聖伝の研究』に現れる口承文学の作品約 13 万詩句をあわせても 2 度しか出てこない。これらの書物は、主として日高・胆振地方に伝承された叙事詩を集めたものだが、2 例とも 1940 年石狩地方近文(旭川市)の鹿田シムカニより採集された一編の神謡の中にある。その 1 例をあげる [17, p. 479]。

Pon chupka-un-kur	若きチュプカ人
tuki riki-puni hawe	杯を高く捧げていへる
ene ani;—	ことかくありき;—
“Otashut-un-mat	「オタシュ ツ 媛
An-kamui tureshi!	わが神なる妹よ!
an-pakeshehe	わが飲みさしを
uk wa i-kore yan!”	受けて飲みたまへ」

そこには次のような注記がみられる [17, p. 706]。

Otashut-un-mat otasut (ota 「砂」 sut 「根元」, 砂丘の側。北海道・樺太にこれと同一もしくは似た形の地名が多い。どこにもあり得る地名。=ota-sam) un (...の, そこにいる) mat (女, 女神); オタス

## ツ 媛, オタシュツ

久保寺先生は『アイヌ叙事詩神謡聖伝の研究』で、1936年採録の日高の沙流に伝承された神謡の1つに現れる Otasam-un-kur に注を施しているが、その中でも ota-sut に触れている [17, p. 701-2] .

Otasam-un-kur ota (砂, 砂丘) sam (側) un (にいる) kur (人): otasam の地名は北海道・樺太に多い。海より砂浜をへ、砂丘をこえて草原となる辺が、otasam である。また ota-sut といっても同じ。otasut (otashut) も地名に多い。

otasut-un-kur 「オタスツの人」ないし pon otasut-un-kur 「小さなオタスツの人」と呼ばれるヒーローは石狩・十勝・釧路、先に見た樺太の伝承に出てくる [11, p. 8] . しかし、それらの物語を読んでもなぜヒーローが otasut-un-kur と呼ばれるのかわからないと思う。それは単なる符丁のようなものなのだ。物語の中で otasut の情景が叙せられることもないし、ヒーローたちが otasut の住人である必然性は物語からは出てこない。たとえば私はかつて島に紐をかけて、泳いで島を引っ張る otasut-un-kur の石狩と十勝の伝承を紹介したことがある [12, pp. 203-223][15, pp. 123-285] . それらの otasut の人が海に関わりの深いことは明らかだけれど、物語からは otasut の地形は読み取れない。

久保寺先生の注記に戻ると、otasam という地名は多いとあるが、北海道にはみられず、樺太に2箇所あるにすぎない [26, p. 146-7] . また、otasut も地名に多いとあるが、永田方正の『地名解』によるなら北海道には6箇所あるだけだ。それは既に見た。それにもかかわらず「どこにもあり得る地名」と書かれているのはなぜなのか。

久保寺先生はオホーツクの人だから、あの延々と続く海岸段丘とその下の砂浜をイメージしたのに違いない。久保寺先生は otasut を「砂丘の側」と訳しているが、オホーツクの海岸はどこも「砂丘の側」といえる。だから「どこにもあり得る地名」という印象を持ったのではないか。「砂丘の側」という解釈にはバチエラーと知里先生の説の影響が感じられる。また、otasut と otasam を同じ意味としたのは久保寺先生がごく気軽に知里説を引き継いだからではなからうか。

## 5.3.4 otasut の解明へ 山田説

山田さんが otasut に最初に言及したのがいつのことかわからないが、『アイヌ民族誌』(1969) に寄稿した「北海道のアイヌ地名」の「オタ」の節に次のような解説が見られる [1, p. 105] .

<sup>うたすつ</sup> 歌棄 後志国寿都郡 オタ・スツ・ナイ Ota-sut-nai 「砂浜(の)・根もと(の)・川」の下略

松前追分節に「せめて歌棄、磯谷まで」と謡われた歌棄の地名起源は、こんな意味だったという。オタスツは、この有名な歌棄ばかりではない。銭函の西側の浜の名も歌棄であった。積丹の海岸を歩くだけでも、随分な数のオタスツがみられる。例えば古平の東郊にも歌棄がある。どこも砂浜のところの地名だ。スツ(根もと)というのは砂浜が後の小高い草原(浜なすなどがさく)に尽きるあたりのことだそう(小辞典)。

ここでは知里先生の説を紹介しているのにとどまっているが、すでに後志の otasut をすべて尋ね歩いた山田さんの姿が目につくようだ。しかし、この時点ではまだ otasut の意味がわからなかったのだ。だが、17年後に出版された『北海道の地名』(1984)を見れば、この問題が解けたことがわかる。[31, p. 485] .

永田地名解は「オタ・シュツ・沙傍の義」と訳し、知里博士小辞典は「ota-sut・砂浜の・根もと・砂浜

を上り草原になる辺りを言う = ota-sam」と書いたが、このスツの語義がはっきりしない。オタスツという地名は後志の海岸に数カ所あるのであるが、どこも長い砂浜が、これから岩磯地帯になろうとするあたりの狭い浜である。実際には砂浜の端の処についた名なのであった。

これは武四郎の日誌の内容と一致している。また先に述べた kisar sut「耳もと」やサロマ湖の anep-sut「細いもの(細い岬)の根もと」が明瞭に示している sut の意味ともよく釣り合う。「どこも長い砂浜が」の「どこも」という一言に一人のアイヌ語地名研究家の強い自信が感じられる。

★                                 ★                                 ★

講演のあと、アイヌ民族文化センターの小川正人さんから『北海道の地名』の2年後に発表された論文「歌棄(オタスツ)考」(1986) [32] の存在を教えられた。その要点だけを記して擱筆したい。

山田さんは北海道に otasut が6箇所あると述べている。武四郎の5つの otasut は、永田方正の6つの otasut と重なる。[32, p. 20]。

道内を歩き廻ったが、今迄の処その外に見当たらない。

たったこれだけのことが言えるまで苦労は大変なものだったに違いない。それをまず言っておきたい。

山田さんには sut の意味がよく飲み込めなかった [32, p. 20]。

(歌棄の) 二字目の「棄」には少々困った。ヌプリ・スツ(山の・麓)などという。スツ(シュツでも同じ)はよく麓とか裾とか訳す。ふつう物の下の処をいうのに使う言葉。だが、砂浜の下の処だったら波打ち際になってしまう。

さらに次のように推し進めた [32, p. 21]。

砂浜のかたわらなら、浜のそばの至たる処がそう呼ばれていいのだが、この地名はもう少し具体的な地形名なのではないかと考えた。

そこで、永田方正があげた銭函、古平、積丹半島北岸、寿都湾、瀬棚(以上後志国)、そして亀田郡(渡島国)の otasut がどのようなところにつけられたのか、その地名の発生地を探した。そして銭函、古平、寿都湾、瀬棚の otasut の発生地をつきとめた。それはこのようなところであった [32, p. 26]。

オタスツは、オタ・サムのように砂浜の傍のどこにでもある処ではない。砂浜を海添いに歩いた形での端っこの処なのであった。

また、それが武四郎の見た地形と一致することを確認した。

積丹半島北岸と亀田郡の otasut の発生地はわからなかった。

以上のことが「歌棄(オタスツ)考」に記されている。

## 参考文献

- [1] アイヌ文化保存対策協議会. アイヌ民族誌. 第一法規, 1969.
- [2] John Batchelor. アイヌ・英・和辞典. 岩波書店, 4版, 1938.
- [3] 知里真志保. 斜里郡内アイヌ語地名解. 知里真志保著作集, 第3巻, pp. 247-268. 平凡社, 1973.

- [4] 知里真志保. 地名アイヌ語小辞典. 北海道出版企画センター, 1984. 復刻版.
- [5] 知里真志保. アイヌ語入門. 北海道出版企画センター, 1985. 復刻版.
- [6] 知里幸恵. アイヌ神謡集. 岩波文庫. 岩波書店, 1978.
- [7] M.M. Dobrotvorskij. *Ainsko-Russkij slovarj*. Kazanj, 1875.
- [8] 服部四郎. カラフト西海岸北部地名の共時論的研究. 佐々木弘太郎 (編), カラフトアイヌ語地名小辞典, pp. 1-53. みやま書房, 1969.
- [9] 金成まつ (筆録), 金田一京助 (訳注). アイヌ叙事詩ユーカラ集 IV. 三省堂, 1964. 1976 年の第 5 版を使用した.
- [10] 葛西猛千代, 西鶴定嘉, 菱沼右一. 樺太の地名. 樺太郷土会, 1930.
- [11] 金田一京助. 北蝦夷古謡遺篇. 金田一京助全集 第 9 卷 アイヌ文学 III. 三省堂, 1993.
- [12] 切替英雄. 海に浮かぶ山を泳いで引っぱったオタス人の話. 英雄の物語, アイヌ無形民俗文化財記録第 2 輯, pp. 203-223, 1982.
- [13] 切替英雄. アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞. 言語研究, No. 86, pp. 105-121, 1984.
- [14] 切替英雄. 書評山田秀三『北海道の地名』. 読書北海道, No. 86, p. 2, 1984.
- [15] 切替英雄. アイヌ語十勝方言による昔話「島を引いて泳ぐオタスの少年の物語」の辞典と文法 (1). 北海学園大学学園論集, No. 88, pp. 123-285, 1996.
- [16] 切替英雄. 頻出アイヌ語地名の形態論的構造. アイヌ語地名研究, No. 3, 2000.
- [17] 久保寺逸彦. アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究. 岩波書店, 1977.
- [18] 松浦武四郎. 北蝦夷山川地理取調図, 1860. 北海道大学北方資料室蔵.
- [19] 松浦竹四郎 (編者高倉新一郎). 松浦竹四郎廻浦日記 (下). 北海道出版企画センター, 1978.
- [20] 松浦武四郎 (監修・校閲・解説高倉新一郎). 東西山川地理取調図. I K 企画, 1983.
- [21] 松浦武四郎 (翻刻・編秋葉實). 校訂 蝦夷日誌【三編】. 北海道出版企画センター, 1999.
- [22] 松浦武四郎 (編者吉田常吉). 新版 蝦夷日誌 (下). 時事通信社, 1984.
- [23] Alfred F. Majewicz and Elżbieta Majewicz. *An Ainu-English index dictionary*. Poznań, 1986.
- [24] 永田方正. 北海道蝦夷語地名解. 国書刊行会, 復刻版, 1972.
- [25] Bronislaw Piłsudski. *Materials for the study of the Ainu language and folklore*. Cracow, 1912.
- [26] 佐々木弘太郎. 樺太アイヌ語地名小辞典. みやま書房, 1969.
- [27] 高倉新一郎, 更科源蔵, 河野広道. 北海道駅名の起源. 札幌鉄道管理局, 13 版, 1962.
- [28] 渡辺仁ほか. 昭和 58 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1984.
- [29] 渡辺仁ほか. 平成 4 年度アイヌ民俗文化財調査報告書. 北海道教育委員会, 1993.
- [30] 山田秀三. 札幌のアイヌ地名を尋ねて. 楡書房, 1965.
- [31] 山田秀三. 北海道の地名. 北海道新聞社, 1984.
- [32] 山田秀三. 歌棄 (オタスッ) 考. 北海道の文化, No. 54, pp. 20-27, 1986.
- [33] 山田秀三. アイヌ語地名の輪郭. 草風館, 1995.
- [34] 山田秀三, 佐々木利和. アイヌ語地名資料集成. 草風館, 1988.